

編集室

* 東日本大震災が発生してから1年となる。ここでは、本特集号の企画から脱稿までを振り返ってみたい。

* 本特集号の位置付けと編集体制

会誌では、これまで大規模災害発生から1年後等の節目において、情報通信技術の視点から、被災・復旧状況、防災・減災の技術動向や方向性等を、特集号として会員の皆様にお届けしてきた。東日本大震災もこれに従い2012年3月号をターゲットに特集号を企画することにした。過去の特集号については2011年6月号の編集室に今井編集理事がそのエッセンスをまとめられているのでこの機会に是非読んで頂きたい。

情報通信技術の全分野（基礎・境界、通信、エレクトロニクス、情報・システム）の目を通して、読者に伝えたいトピックを抽出したいとの考えから、通信分野（WG・B）がまとめ役となり、全分野（WG）の主査が特集号の編集メンバーとして参画するWG横断の体制で取り組んだ。また、特集号の企画開始時期がWG・B主査の交代時期と重なったため、前任の笹山主査にも引き続き参画頂いた。本特集は、まさに会誌編集委員の総力をかけて取り組んだものである。

* 編集状況

編集メンバー間では、幾度かの長時間の電話会議、多くの電子メールを通して、トピックとその概要について意見交換と意識合わせを行い、1か月程度と短い期間ではあったが骨子を固めることができた。編集メンバーの方々には非常に多くの時間を割いて頂き、ボランティアの域を超えていたのかもしれない。本テーマの位置付け、そして伝えたいという気持ちを編集メンバー一人一人が強く持っていたからこそ取り組めたことと思う。

当初は、できることであれば、被災地の生々しい声を読者に届けられないかとの思いから、著者を検討してみた。しかし実際は、余りにも大きな災害・被害、そして最優先は復旧・復興活動であること、半年もたっていない段階では執筆に割ける時間がとれないことを改めて認識させられた。こう

した中でも総括は被災地の方に何とかお願いできないかとの思いは強く、御無理を言って東北大学の中沢教授に総括の記事を依頼し引き受けて頂いた。超御多忙中にもかかわらず「東日本大震災を振り返って」という題目で記事を寄せて頂いた。生々しい被害状況と復興にかけ強い思いが伝わる記事である。読者の皆様には是非一読頂きたい。

本特集の内容は本当にこれでいいのか、より良い特集記事にできないかとの思いを、編集メンバーと酒井編集長をはじめとする会誌に携わる全ての者は持ち続け、骨子を一度確定した後も、トピックや記事内容についての全体バランスを踏まえて、記事の順番入替えや、記事の追加等を時間の許す限り行った。他の学会誌の記事との重複の恐れがあることが判明し取り下げた記事も出た。原稿締切りの数日前である。

こうした編集工程を経て、情報通信インフラの被害と復旧、インターネットやTwitter等による情報流通、今後の大規模災害に備えた技術の三つの大きな切り口から、計13件のトピックを読者の皆様にはお届けする運びとなった。

* 編集を終えて

安堵するとともに、東日本大震災に関わるトピックのごく一部に限定となった感は否めない。甚大かつ衝撃的な大規模災害であり、そこからは多くの貴重な教訓を得た。会誌としても引き続き機会を見て、その時点の視点から特集等を企画していきたいと考えている。本特集号に続いては9月号に「人間中心の観点での東日本大震災からの創造的復興」を予定している。著者として被災地の方々に多く協力頂ける予定である。

今年1月号からの表紙を御覧になって気づかれた方もいらっしゃるだろうか。「鎌倉の鶴岡八幡宮にある倒れた大銀杏から新芽が出ている」表紙であり、震災からの復興、再生を強く思い、希望につながるものをという考えから選択されたと聞いた。「特集編集にあたって」にも書かせて頂いたが、我々は、この困難を乗り越え、想定を超えた復興を遂げられると確信している。この大銀杏の新芽のように未来に向かって力強く、復興に向けて、がんばろう！

（編集特別幹事 源田浩一）